



## 闇と光をいだいて

著者	李 相勲
雑誌名	エコノフォーラム
号	27
ページ	63-63
発行年	2021-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029390">http://hdl.handle.net/10236/00029390</a>

2020年  
11月24日  
火曜日

李 相勲 専任講師（宣教学）

# 闇と光をいだいて

人間の心の奥底には「心の闇」とも言うべき、自分でも制御することのできない怪物のようなものが住んでいる、と時々思われることがある。この心の闇は、私たち人間の心の中にある、自らが肯定することのできない、受け入れることのできない部分から生まれるものではないだろうか。人間は誰しも自分の中にこのような否定的な部分、愛せない部分を抱えて生きている。

私たちは、この闇の部分に「直そう」あるいは「なくそう」として大きな努力を払うが、時にはその努力がかえって重荷となり、自分を愛せない、肯定できないという気持ちさがさらに大きくなってしまいうことももある。私たちがこころでなすべき問いは、人は自分たちの中の闇の部分を否定しようとするが、果たして本当にそうする必要があるのだろうか

という問いである。このことについて、漫画『風の谷のナウシカ』に出てくる一場面を例にあげながら考えてみたい。

その漫画のクライマックスとでも言うべき場面、主人公であるナウシカという名の少女は、汚れたものではなく、清いものだけが存在する世界を目指す人物に向かって次のように語る。「なぜ、気づかないのだからか。清浄と汚濁こそ、生命だということに。苦しみや悲劇や、おろかしは、清い世界でもなくなりはない。それは人間の一部分だから。だからこそ、苦しみのある世界にあっても、喜びやかがやきも、またあるのに」。

この言葉でナウシカは二つのことを述べている。一つは、光と闇、清い部分と汚い部分の両方があつてはじめて人間なのだということであり、もう一つは、光と闇の両方があ

るからこそ、喜びや輝きといった感情の高まりも経験できるのだということである。私たちの中にある闇の部分は、否定する必要のない私たちの一部なのである。

『風の谷のナウシカ』では、先ほどこに続く場面、ナウシカの対話相手「生命は、光だ」と主張する。それに対してナウシカは、「ちがう、いのちは、闇の中のまたたく光だ」と反論する。この言葉によって、ナウシカは次のようなことを伝えようとしているのではないだろうか。「人間はその内部の大部分を闇に覆われているけれど、小さいながらも光も必ずある。そして、その小さな光を支えに生きることができるとだ」。

聖書の創世記1章には、神による天地創造物語が記されている。最初に神がおこなつたのは、光を創造し、闇と光を分けることであった。

ここで注目したい点は、その際に神が闇を無くさなかったことである。創世記1章31節には次のように記されている。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」。ここで「良かった」と訳されている言葉は「美しい」とも訳すことのできる言葉である。神は、その創造したものすべて、闇をも含めて「美しい」としたのである。

心の闇が私たちを苦しめることがあるかもしれない。しかし、そこには小さくとも光が必ずあり、私たちは人間はその小さな光を支えに生きていくことができる。心の闇は、神の創造の業の一部であり、それを含めて私たちは神によって「美しい」と肯定されているのだということを心に刻みつつ、それぞれの人生の道を歩めればと思う。